

2009年10月26日に北海道大学で開催された博物館ボランティアの集い(主催:(財)北海道開拓の村・北海道大学)での発表要旨に加筆修正したものを掲載します。

伊達市はこの10年間、官民協働による条例策定や文化イベントなどを多数実施し、文化財ボランティアなど多くの市民が遺跡や文化財を支えるなど、官民で地域の文化を考え、活かすという機運が醸成しています。

このような中で、市民が持つ情報や能力を文化行政やまちづくりに活かすための制度として市民学芸員制度を設けました。この制度は、より深く博物館活動を行いたいという市民に対し、それに応える博物館サービスの一つと位置付けています。

本発表ではこの制度が「市民」・「地域」・「博物館」のそれぞれにメリットを生むものであることを述べました。また、現在、市民学芸員の会(林良平世話人代表)が中心となり行っている「地域に必要な博物館とは何か」を市民自らが考える取り組みについて紹介しました。

最後に、これからの地域博物館では、博物館と「気楽に付き合いたい」という利用者へのプログラムとともに、「深く付き合いたい」利用者に対するものも併せて用意する必要があることを述べました。

1. 伊達市の博物館の現状と官民協働の取り組みの経緯

市内の博物館的施設は、伊達市開拓記念館や史跡北黄金貝塚公園、宮尾登美子文学記念館があるほか、これらを所管する機関として伊達市噴火湾文化研究所(以下、文化研究所)があります。

文化研究所では後に述べる様々な事業を官民協働で取り組んでいます。これは、伊達市には環境基本条例制定(1998)や、だて噴火湾縄文フェスタ(2001)、第57回日本人類学会伊達大会(2003)など官民協働で事業を行うという素地があり、その上に文化研究所がつくられたためです。

2. 文化財ボランティア制度(1999年～)

伊達市開拓記念館と史跡北黄金貝塚公園には、それぞれ解説系と自然系のボランティア団体があり、文化

研究所がこの4団体の事務局を担っています。また、だて観光協会有珠支部が事務局である有珠善光寺の解説ボランティアとも緊密な関係にあります。

各団体はそれぞれの施設の魅力アップに大きな役割を果たしてくれていますが、同時に、ボランティア自身も活動を通して様々な刺激を得ることができ、学習意欲が湧く、よい機会となっているようです。

これは活動の場である各博物館において学習と実践が行われるわけですから、琵琶湖博物館の布谷知夫氏のいわれる「施設活用型の学び」(布谷, 2008)にあたります。

3. 市民学芸員制度(2007年～)

伊達市内には市民による研究系の団体が多くあります(伊達市郷土史研究会、刀剣保存会、古文書解読の会、噴火湾考古学研究会、ネイチャーウォッチングクラブなど)。つまり、豊富な知識を持って、物事を調べているプロやセミプロがたくさんいるということです。そこで、市民の皆さんが持っている様々な知識をまちづくりに活かして欲しいという考えから、「市民学芸員制度」を発案しました。

対象者は研究系の団体に限らず、市内外の一般市民で、高校生も可能です。現在、10数名の参加者がいます。

実際にこの制度で行うことは、応募者が関心のあるテーマを私たち学芸員と話し合いながら、さらに詳しく調べ、そこで明らかになった成果を「まちのために活かす」方法を考え、そして実践することです。つまり、この制度の特徴は、①博物館学的方法論を身につける、②まちづくりに活かすための研究をする、③博物館での展示・講演・ワークショップ等を通して成果を発表する、の3点があげられます。

例をあげましょう。伊達市は「手打ち蕎麦」を出す店がとても多い街です。お客さんも市外からわざわざ食べに来ますが、お店自体も他所からやってきて伊達で開業する場合があります。

そこで、テーマを「なぜ、伊達は手打ち蕎麦を出す店が多いのか」とし、その歴史を調べます。方法は、蕎麦屋の店主や、昔、石臼やこね鉢を使ったことのある人への聞き取りや、文献調査などです。

調べた成果は、まちづくりのために活かされなければなりません。例えば、調べた歴史を各店のパンフレットやホームページに載せることで、伊達市における「手打ち蕎麦文化」の存在をアピールできます。

箸袋にちょっとしたウンチクを書くのもよいでしょう。手持無沙汰な客は必ず読みます。また、歩き回った際に作った地図は「手打ち蕎麦マップ」として、観光パンフに活用できる、といった具合です。

この市民学芸員制度による研究は、先の布谷氏の分類では「自主活動型の学び」(布谷,2008)にあたります。そして、この制度は、市民・地域・博物館のすべてにメリットを生む博物館サービスだといえます。つまり、知的好奇心を持つ市民(利用者)は、研究・公表などについて博物館(研究所)のバックアップが受けられ、自己実現を可能にします。一方、地域社会は研究成果がまちづくりに活用され、まちの魅力アップにつながります。そして博物館は、新たな情報と研究成果を手に入れることから、展示やイベント企画などの博物館活動に利用できるのでした。

4. 新しい博物館づくりと市民学芸員の役割

伊達市には、武家文化財を展示している老朽化した資料館がありますが、旧来型の展示のみを行う「施設」であり、市民の生きがいにつながる教育「機関」としての機能を果たせない状況にあります。市の総合計画には新博物館の建設も記載されていますが、財政難につき棚上げ状態です。しかし、この状況も「本当に市民にとって必要な博物館とはなにか」を考える良い機会だと考えています。それは市の担当者にとっただけではなく、市民にとってもです。

そのような中、市民学芸員が中心となり、「博物館づくり」について考える市民団体である「21世紀市民プロジェクト“ミュゼ”」が結成されました。メンバーは、市民学芸員のほか、行政・経済・報道・教育・ボランティア団体など各分野の40名です。



「博物館Jr.ワークショップin伊達中」のようす
中学生が「伊達にとって大切なものは何か」を考え、発表した。

会の活動は、伊達市に相応しい博物館とはなにかを考えることを目的に、情報を集めるための実験的イベントを開催しています。2008年9月からは、花王・コミュニティミュージアム・プログラムの助成を受けて「街かど博物館『街並み・思い出写真展』」、「博物館Jr.ワークショップ」等のイベントを実施し、展示会へ来場した市民の方や、ワークショップに参加した中学生の意見を聞きました。

このように、博物館づくりに市民が関わった例は、滋賀県立琵琶湖博物館がありますが、そんなに多くはありません。伊達市では、かつて文化センターを建設する際にも市民による検討が行われており、また、建設後は「市民メセナ」による芸術・文化の発信が行われるなど、市民によるまちづくりが実践されてきたまちといえます。

博物館づくりについても、計画段階でどれだけ多くの人々に関わってもらえるかが鍵であり、これがオープン後の博物館の利用度を大きく左右することになるでしょう。

5. 地域博物館における利用者別プログラムの必要性

博物館の利用者については、①博物館と「気楽に付き合いたい」利用者と、②「深く付き合いたい」利用者の二つのタイプが存在します。展示やイベント時のみ訪れるのが前者、興味関心があることを自ら調べる、あるいは学芸員と共同して調査するなど、積極的に博物館を利用するのが後者です。後者は、グループをつくり、展示やイベントの企画を行う場合もあります。

これからは、団塊の世代の退職期にあり、「深く付き合いたい」利用者が増えることが予想されます。もちろん、地域博物館は両タイプの欲求を叶えるプログラムを準備する必要があるのですが、特に後者への対応が求められるでしょう。

そのために必要なのは、①学芸員の質の向上、②専門分野の異なる人員の確保、③他の研究機関との連携、④利用者の学習環境の整備の4つがあげられます。

参考文献

布谷知夫、2008「地域について学ぶ～博物館でおこる学びの意味～」『博物館ボランティアの集い2008発表資料』